



「ブリテンとラテン」
 [ブリテン：シンフル・シンフォニー
 Op.4, ヒナステラ：弦楽のための協奏曲Op.33, エルガー：弦楽セレナード ホ短調Op.20, ヴィラ＝ロボス：ブラジル風パッサム第9番]
 長岡京室内アンサンブル（音楽監督：森悠子）
 （録音：2004年7月、2006年7月）
 [FineNF①NF60105 (SACD), NF20105 (CD)]

緻密さと美しさ、 個性と調和の 稀有なるアンサンブル

長岡京室内アンサンブルが、
ブリテンのシンフル・シンフォニー、
難曲ヒナステラの弦楽のための協奏曲、他を録音

NEW DISC 6

満津岡信育 Nobuiku Matsuoka

1997年に、森悠子を音楽監督に創設された長岡京室内アンサンブルのディスクは、これまでもN&Fから発売されており、演奏と録音の両面で話題になったのは記憶に新しいところである。今回、わが家に到着した「ブリテンとラテン」は、オリジナル・メタル・マスター・ダイレクト・プレスによるSACDであり、とにかく音がいいのには驚いた（同一曲目を収録したCDはNF20105）。

鮮やかなブリテン、難曲を 陰影豊かに描くヒナステラ

長岡京室内アンサンブルは、ブリテンとエルガーを4・3・3・3・1の

計14名で演奏しているが、緻密さと調和を兼ね備えているのが特徴だ。例えば、《シンフル・シンフォニー》第1楽章の練習番号8（トラック1・2分16秒）から、「アニマート」の指示に即して、生き生きとした表情を発し、響きの色合いをがらりと変えていくあたりを耳にしていただければ、たちどころに納得していただけたことだろう。第2楽章中間部では、思い切りよく弦を弾ませ、ユーモラスな表情を醸し出すことに成功しており、べたべたとした感傷を排しながら、美しい旋律線を表情を込めて歌い抜いた第3楽章も印象的。第4楽章もアクセントをきっちり付けながら、こざっぱりとした演

奏を披露しており、各パートが伴奏にまわって音符を刻む際にも毅然とした響きが保たれている。ヴァイオリン・パートには、高木和弘や米元響子の名もあるが、個々の技量だけではなく、アンサンブルとしての練れ具合も好ましいものがある。

ヒナステラとヴィラ＝ロボスはメンバースで一部入れ替わっているが、やはり14名で演奏されている。ヒナステラが、65年にベルリンで作曲した《弦楽のための協奏曲》は、微分音や辛口の不協和音を用いるなど、尖鋭的な響きを駆使した名品である。各パートのソロを活用した変奏曲形式による第1楽章では、陰鬱に富んだ響きが奔放に飛び交っていくが、独奏とトゥッティとの対比感や両者が交錯する様子が、鮮やかに再現されている。弦楽器の鮮烈なアタックと減衰音の自然な響きもお見事。第2楽章では、ハーモニクス奏法を使用し、弱音器を付けさせたうえで多彩な奏法を駆使して、幻想的な音楽が紡ぎ上げられていく。「苦惱のアダージョ」である第3楽章も、独特な陰翳がしつとりと再現されている。第4楽章は、ヒナステラ特有の野性的なリズムで疾走する音楽であり、ここでも長岡京室内アンサンブルの合奏力が光っている。ただし、この楽章の音量が上がる局面では、残響が豊かなのが、

やや裏目に出ている気がしてしまふ。もう少しソリッドな感触が欲しかったというのが、筆者の個人的な感想である。

演奏、録音の双方で 極めて高い完成度

エルガーの《弦楽セレナード》は、より大編成による録音と比べてしまうと、豊麗さや強弱の対比の面で物足りなさを感じる人もいらっしゃるだろう。長岡京室内アンサンブルは、第1楽章冒頭でヴィオラが刻むリズムをきっちり奏で上げ、めざましいアプローチを繰り返している。第2楽章の練習番号1（トラック10・0分55秒）から、第1ヴァイオリンが「ドルチェ」と指示された旋律線を奏で上げていく箇所などは、まさにふるいつきたくなるような演奏になっている。終楽章で第1楽章冒頭のリズムが回帰する箇所も、鮮やかに処理されている。4曲目に収録されたヴィラ＝ロボスの《ブラジル風パッサム》第9番も名演であり、演奏と録音の双方において、きわめて高く評価できるディスクに仕上げられている。なお、完全受注生産品として、世界初のハード・ガラス製音楽CDであるExtreme HARD GLASS CD (NF20105EX) も用意されているということだ。